
純愛 ~ありがとう~

葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純愛～ありがとう～

【Zコード】

N7447Z

【作者名】

葉月

【あらすじ】

突然お兄ちゃんができちゃったおんなのこのはなしです

家に美形がやつてきた

もし、突然兄ができるたらあなたはどうしますか…？
しかもそれがあからさまにもうそうなイケメンだつたりしたら…！
普通の女子中学生としてはどうしたらいいんですかあつ。

時は数時間前にさかのぼります。

いつも通り学校から帰つてドアをあけたお母さんと若い男の声…。

「ほんと、唯^{ゆい}くんはかわいいわねえ」
「いえ、そんな…ほんとありがとうござます。お母さん
お母さんっつ…？なんで…？どうして…？どうしたの…？
おやるおやるコピングにこくと カラカラの髪に切れ長の目
やさしそうな笑顔のあたしの学校の高等部の制服をきた美少年がお
りました

「おやつとおやせ…？」びりこりんよ、しれは…」
「あらあ、おかえり、愛莉。今日からつかの息子になつた、唯く
んよ」

…

美形の事情（前書き）

なんかありがちな感じですみません…

美形の事情

「はじめまして愛莉ちゃん。今日から山本家にお世話になる山本唯です」

「は…はじめまして。山本愛莉、城門学園中等部2年1組41番ですっ」

「愛莉、お父さんの親友の息子さんよ。この間の地震で観光に行つていたじ両親が…」

「お母さん、重い話は置いとこ…。オレ、この明日から城門高校の高等部に転校するんだ。よひじく なんで、愛莉ちゃんが泣くんだ…」

「『めんなれ』…明日からよひじくお願いします」
逃げちゃつた…自分の部屋に…だつて、悲しそうな

『ノンノン』

ノックと同時に唯さんが入ってきた

「愛莉ちゃん、オレはね、親父とお袋が死んでも悲しかったよ。でも、一人は一緒に死ねたんだ。せめてバラバラじゃなくてよかつたと思つてる…だから、泣かないで」

「…はい」

「それで、オレ高等部1年1組なんだけど担任つてどいつひとつ?

「松本先生…40歳くらいの男の先生で、社会の先生。太つてるけど、話はおもしろいです」

「そうかー。結婚してる?」

「してない、うえにはげてます」

「アラフォーで未婚で太つてて、はげ?残念な感じだなー」

「アハハ、そうですねー。松本先生はおもしろいんですけど、学年主任の一階堂先生はこわいです。」

「もしかして、数学?」

「国語です」

「残念、はずれたか。じゃあ、夕食を食べに行こう。今日はカレーだつて」

唯さんが出ていくと部屋が少し暗くなつた感じがする。明日、あんなかつこいい人が転校してきたり話題になるだろ?」な

尊の美形の鱗丸（複数形）

「んばんはー、いまサブタイトルの付け方になやんでいます。なので
サブタイトルがめちゃくちゃです…」

噂の美形の騒ぎ

「愛莉ーーー！今日一緒に登校してきた人だれよ？すごいかつこよかつたよねーーー？」

「アーニー、立つてた」

朝、教室に入ると案の定にクラスの子に質問攻めにされた。

「お兄ちゃん きのうできた!」「!?」

10/14

「え？」
「そーぞー！」

「いいなーかつこいいお兄ちゃん」

「紹介してよ！！」

「えーと… そろそろ来ると思うよ? ホームルーム前に学校案内す

るつていつといたし

「…………」

「愛莉ちゃん！！」

やつぱ、誰をもがいこなー。

「身長何センチですか？」

「写真撮つていですか？」

なんか、すゞい騒ぎに……案内はできないかな……

『ヒンヒンがヒンヒン』
予鈴だ。

「ところが、愛莉ちゃんせつかく約束したのにごめん。また

ね
!

唯さんは風のよつと/orてにやめた。

試験

一学期中間試験もまつた。中の今日この頃……なんで試験とかあるんだろ……なくていいよね?なくなればいいのに!」

試験勉強に追われて頭が壊れ気味です……とはいえ、試験も明日で終わり!おわる!…やっと!…!

私も誰さんもさうと部屋で勉強しているのでお母さんごめんなさいです。

『ノンノン』

「愛莉ちゃん、いる?」

唯さん?

「はーい、ビーベー」

「夜遅く」「めんね?シャー蕊あまつてない?」

「ありますよー、はー。明日は自由ですね」

「そうだね。でも、」「お泊りのお店じりなんだよね…」

「案内しますよ」

「ホント?ありがとうございます。今度よろしく。」

試験終わりました!!英語がホント難しくて!過去形とか、現在進行形とか、わけわかんない。

学校から家に帰つてドアを開けるとお母さんと誰さんの話声デジヤウ

「と、こうわけで、わたし今から3泊4日で北海道旅行に行つてくるから、家と愛莉よろしくね。学校も試験休みだし大丈夫でしょう」

「わかりました。行ってらっしゃい」

「お母さん!?!」「きなりビーブしたの?」

「友達に誘われてねー。じゃ、行つてくれるね」

ハハ去つていきました。

「愛莉ちゃん、お店案内してくれるつていつたよね。いまでもいい?」「

「いいですよー。駅前でも行きますか?」

「うん、ありがとう。洋服がなくて困つてねー。つていうか、

そろそろお兄ちゃんつて呼んでほしーな

ハイ?

「どうじでですか?」

「家族がほしいんだ…」

あ…そつか…じゃあ

「一緒に買い物いこひ、唯お兄ちゃん。夕食も買わないとね」

やつひこひと唯さんはうれしそうに笑った

お買いもの

「唯さん、何買つんですか？」

「あれ? 唯さん、に戻っちゃうのか。」

「外では。だって、似てないから、わけありますって言いふらしているようなものですよ?」

「そつか。愛莉ちゃん、ちょっとこのお店入つていい?」

いいながら唯さんは、メンズのお店に入つて、Tシャツとパーク

ーとジーンズを即買いした

「試着もせずに買つていいんですか?」

「うん。愛莉ちゃん、ガソリンスタンンドとファーストフード店とカラオケどこが好き?」

「…カラオケ?」

「じゃあ、バイトはカラオケにしようかな。」

「バイト、するんですか? つていうかそんな簡単に決めちゃっていいんですか?」

「決断は早いほうなんだよね。考えたつて変わらないし。後で面接受けにくから夕飯任せでいい?なんか買つてね」

「いいですよ。もう買つものないなら今から言つてきても。」

「ありがとう。お礼になんか買つてね」

千円札を一枚を残して唯さんは去つて行きました

4時間後 19時

「ただいまー、遅くなつてごめんね。…ごめん、疲れっちゃつて夕食たべれそうにないから冷蔵庫入れといてくれる?」

唯さんふらついてるんですけど、だいじょうぶかな?

「それはいいんですけど、だいじょうぶですか?」

「つ
て、
え
…熱
！？」

過去（前書き）

唯
視
点
で
す

過去

立ち上がる……だるい……

「……ごめん、愛莉ちゃん……ちょっと部屋行くね……」

言い残して、部屋に入つてベットにたおれこむ

眠い

親父？お袋？どこいくの？ダメだよ……そつちは地震が！
ねえお願ひこつちに来て！！

こつちだよ！！！

「……ん…夢か」

「お兄ちゃん…おはよう。大丈夫？うなされてた。もう朝十一時
だよ」

「愛莉ちゃん！？」「ホフ…」

額に愛莉ちゃんの指が当たる。冷たい

「熱…高いね…体温計とスポーツドリンク持つてきておいたから
「ありがとう…いつから部屋にいたの？」「つづちやうでしょ」

「大丈夫。おかゆ食べれる？」

「「じめん…お腹すいてなくて…」

「うん。ゆっくり休んでね」

そういつて愛莉ちゃんは部屋を出て行つた

大きくなつたな…愛莉ちゃんは覚えてないけど幼いころに何回か
会つてゐる。オレが5歳の時に引っ越しして以来会つてなかつたから驚
いた。オレの記憶の中では愛莉ちゃんは3歳のままだつたから…
可愛かつたよ？子犬っぽくて。そういうのはいまもあんま変わ
つてないけど。

「「ホ…」「ホッ ホ… 頭痛い…」

まづいかも。なんか熱上がってる感じするし…… 39・4度?
知らないほうが良かつた気がする… 傷とかも見ると痛くなるじやん!

…メール?

『お兄ちゃん、私たちと友達と遊んでくるね…お大事に。お鍋にお粥があります。よかつたら食べてね』愛莉

外行つてくれるのは助かる…移したくないから

広い部屋…高校生のしかも、養子の部屋で10畳は広すぎるよね
?高校も行かせもらつてるし…バイトして返したかったんだけど

…情けないな。

お腹すいた。お鍋にお粥?

「うわっ……クラクラする…」

立つた瞬間めまいを感じて座りこむ…お粥はあきらめるか

「はあー、ホント情けない」

唯さんの風邪もすっかり良くなつて、衣替えの季節です……

制服も、冬服から夏服に代わつて、なんか新鮮です。冬の黒…紺
？色のセーラーから白いセーラー服になつて気分も明るくなる…

「愛莉ー、宿題やつた？」

「国語と数学はやつたよ？」

試験休みは短いくせに宿題はたくさん出るんだよね

「つまり、英語はやってないんだよね？ 英語見せてあげるから數
学うつさせて！」

「交渉成立」

ハイタッチ。親友の麻里とは苦手科目が違つから便利。

「今日、なに返されるかな？」

試験の後の授業はほとんどがテスト返し。

「英語と、数学代数、数学幾何、国？、理科？、世界史かな？あ、
先生きた」

担任の田中先生は優しすぎてみんな話を聞かずにしゃべつてる。

…体育祭とか聞こえたような…一週間後！？

うちの学校の体育祭は、中1から高2まで縦割りに5チーム…唯
さんと同じチームじゃん！！

「愛莉ー、うちら実行委員だったよね？」

斜め前の席の麻里が小声でいつている…そうでした…忘れてたけ
ど、4月10日そななものになつてました

「…そうだね」

「楽しみー」

「何が？」

「だつて、ほら、みて？」のプリント

麻里と話してる間にプリントが配られたみたい…実行委員のみん
なへ、昼休み203教室に来てください。実行委員長有川 直樹、

副委員長林 未来・山本 唯…！？

「愛莉のお兄ちゃんと初対面！」

「…転校してきて1ヶ月の人ができるの…！？」

「できるんじゃない？一人いるし」

「…」

「愛莉ー遅れちゃうよ。早くこいー」

「まだ早いでしょ」

麻里は実行委員会が始まるまで後15分もあるのにそんなこと言つてる

「唯さん、見てみたいんだもん」

「だもんつてアナタ何歳?」

- 14歳 しかし行け!!

無理やり弓を張られる

卷之三

203教室、まだ早いのにもう何人かいる
といふと素直に麻里は勝から手を離した

「唯さん！」

あれ、愛莉が何を実行委員会がやるの

「アーニング・アンド・ラーニング」

「……」

遠くから声が飛んできた

「それ、押しつけつていうだろ!?」

「ノーノーノ
あ、
はじめまして
愛未の友達の小池麻里です」

「二〇一〇年九月三十日」

卷之三

学年で50人だからあたりまえかな?

「じゃあそろそろはじめるから」

前に出ると唯さんは話し始めた

第一回体育祭実行委員会をはじめます。高等部1年1組山本唯

です。委員長がいないので同念やりさせてもらいます。楽しく安全な体育祭にしたいです。では、高等部一年生から順に自己紹介お願ひします

「委員長、たほりかな?」うちの学校の行事は、基本高3は受験があるから雑用はしないんだよね。

「次は中2お願いします」

唯さんによく通る声

「1組小池麻里です。よろしくお願いします」

「同じく山本愛莉です。よろしくお願いします」

びっくりした…

「次に放送、用具、得点、会場などの係を決めます」

「なんか、唯先輩、そつないよね」

麻里が小声で言つてくる

「そうだねー、慣れてんのかな?」

「あんだけ目立つてれば慣れててもいそうだけじね」

確かに、あんまりじっくり見たことないけど、少し長めの栗色の髪はさらさらで、ちょっと細いけど背は高いし顔も整い過ぎてくらいい整つてる…

「愛莉ー? いくらかっこいいからってガン見しちゃ。私たゞ得点係の午前中の後半に決めちゃうよ」

「えつ? あ…うん、任せる」

体育祭ー 3（前書き）

学校の課題、やっと終わりました！！
といつて、すこしづしづに書いてみました

体育祭ー 3

体育祭当日です。

…事件は起きました。得点版が消えたのです。

ちなみに責任者は私、山本愛莉です…あれつ？あの白い板は…？見つかった…！！よかつた…！！

でもなんであんなところに？

場所は屋上、プールに浮いています

…やっぱり、届かない。すぐ届きそうで届かない…あとちょっと

と…

「愛莉ちゃん！」

「え？」

バシャーン…………

「…………」

落ちたのは唯さんです。プール開きした後だから水はきれいとは
いえ、相当冷たいはず…

「うわーーー！すごい！水もしたたるイイ男？」

麻里…いつの間に…。何で、カメラとか持つてゐる…？

「愛莉ちゃん、大丈夫だつた？はい、得点版。ちょっと着替えて
くるから。」

「はい。ありがとうございます」

「ねえ、愛莉…これやつたの、中3の子だよ？気をつけたね。でも、うちその写真とつてたりしてるんだけど。どう使つ…？」

麻里…顔が怖い…

「とりあえず、様子見で」

「そう…愛莉は優しいねー」

シュラバ

「ウザいんだよ！」

「何、妹だからって唯に付きまとつてんの？」「別に付きまとつてはいないんだけど…」

現在、体育祭も無事終わり季節は梅雨。屋上に向かつ階段で上級生5、6人に囲まれています。

「なんか言えよ！？」

背の高い女の手が振り上げられる ヤバ
バシッ

「え？」

目つきの悪い男の子がその女の手をつかんでいた。

「邪魔なんだよ」

「なによ！後輩のくせに生意気ね！！！」

後輩？あれ？私と同一年だ。見たことないけど…

「年上でも尊敬できない人に敬語は使わない主義なんで。それと

も腕力で俺に勝つ？」

「もういいわっ。いこつ」

……

「気をつけろよ。山本愛莉」

「え？」「誰」

「河野響。じゃあな」

「麻里ー。河野響つて誰?」

餅は餅屋。情報は情報屋に、ということで麻里に聞いてみた

「河野響。14歳、4月17日生まれの牡牛座。成績は上の中。

ただし校則違反、遅刻の常習犯」

へー…

「私のこと知つてたんだけど」

「そりや、知つてるでしょ。」

「…え?」

「それで?どうして、河野響?」

「さつき、絡まれてたの…助けてもらつたから」

「それって、もしかしてこの人たち?」

見せられた写真には、さつきの5・6人の先輩が映つていた

「これつてもしかして」

「そう。こないだの得点版隠した犯人。こうなつたら、対策練らなきやねー。愛莉、今日部活?」

「うん。」

実は吹奏楽部でサックスやつてます。大会前だから練習が毎日のようにある。今日はソロパートをもらつためのオーディションがあるから特に遅くなる

「わかつたー。対策、考えとくから。もう時間でしょ」

「ヤバい。じゃあねつ。麻里ー!ー!」

契約？（前書き）

麻里視点です

契約？

んー。『じいじょっかな。あの先輩たちヤバいしアイツにたのむか！

『至急、図書館前までおいでー 麻里』

『了解 韶』

ウチのがつこーの図書館は広くてなんと個人スペースまである。
話し合には都合がいい

「響、久しぶり。それで、あいつらヤバそうだったでしょ？」

「ああ」

「このままだと、愛莉危険だからねー。協力してくれるよね」

「断定で聞くなよ…」

「ふうん。じゃー、愛莉が危ない田にあつてもーの？」

「やらないとは言つてないだろ」

「ゴキョウカリョク、アリガトウゴザイマス それで、今日の

帰り愛莉を送つていつてほしーんだけど

「わかつた」

契約成立。

帰つ道（前書き）

十羅口なんぞ珍しく長々です

帰り道

「では、オーディションの結果、アルトサックスのソロパートは安達美紅さん、山本愛莉さんに決まりました。」

やつたー！！！！

音楽大会のソロパートひける？

でも難しーんだよね…

しかも、一緒に弾く（事になつた）美紅先輩はめちゃくちやくま
いし…

「愛莉！」

はい？って、河野響？なんで？

「えーと…何の御用ですか？」

「麻里に頼まれて。送れと」

「…だれを？」

「お前を」

「…麻里とはどういう関係で？」

「幼馴染」

えー！？

聞いてない。教えてくれたらいいのに…まあ、麻里とは中学からの友達だから仕方ないけど。でも、さっきあの時点で教えてくれてもバチはあたらないのに。」

とりあえず

「送つてくれなくて、大丈夫だよ？遠いだろ？」

「さつきみたいに絡められたらどうするんだ？それに同じ駅だから見たことないんだけど。っていうか、麻里と駅違うよね、それでどうして幼馴染？」

聞いてみると

「俺が中学に入つてから引っ越したから。幼稚園と小学校は一緒
だった」

「じゃあ、よろしくお願ひします」

「ああ。行こうか」

「……」

「……」

歩き出しても会話がない…今日、初対面だよ…。

沈黙が重（く）感じる）い。

「えーと…河野君は部活何に入ってるの？」

「響でいい。帰宅部だ」

「そつかー。麻里は新聞部だよね。昔から情報好きなの？」

「小学校に入る前から、先生とか親の噂話を広めてた」

…恐ろしい子…

「駄ついたな」

「ね

うわ、電車こんでる。遅くなつたから、帰宅ラッシュとかぶつち
やつたかな。

「混んでるねー」

「ああ

「ありがとね、送つてくれて」

「いや…そういえば…それ、サックス、やつてるのか？」

「うん。小学生の時から習つてたんだけど、受験でブランクあい
ちゃつて。」

「大変だな。そういえば、家どこら辺？」

「駅から10分くらい？朝日公園の近く」

「あー、知つてる」

そろそろ着くかな…学校から6駅で結構近い。急行で2駅。
うわー降りる人で流される。

「こつち！」

腕をひかれる

「こんな細くて…運動やつたほうがいいんじゃないかな？」

「非力だと言いたいの！？」

「…」

「言つてる。こつちだよな？」

「そう、で次の角を右に曲がつて…」

電線がなくなつたこの道は綺麗。学校のほうは電線がすごいから。
響くん堂々と歩くなー。麻里と幼馴染とかすごい驚いたんだけど
…。全然似てない。麻里は集団好きだけど（本人いわく、面白い）、
響くんは絶対一人狼タイプだよね

「家、ここ？」

「そう。マンションなの」

「そうなのか。じゃあな」

「うん。ありがとねー。バイバイ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7447z/>

純愛～ありがとう～

2012年1月14日19時49分発行